

たりの草木枯れ果て、川を渡るにせこえし底のうろくづも生を滅し、地神はかうべに七尺の劍を立つるより堪へ難しと宣へば、釋尊も阿彌陀佛・三世の諸佛たち舌をまいてぞ怖ぢ給ふ。

けんろー 或時は騫驢に鞭打つて衣を西山の雨に濕し(持統天皇)

「騫驢」ちんばの驢馬。楚辭・七諫に、「騫驢驪而無策谷」とありて註に「騫、駘也。」

こあげ

こあげ 四五町か六七町何とぞして昇き給へ、小揚に安う賣付けん(西玉母)

「小揚」色道大鏡巻一に「こあげ」竹與乗物を昇く正夫をさしていふ、田舎の舟著に有て荷物運ぶ正夫どもを中衆など云ふ名目あり、是等をこあげとも云、嘗道にて朝夕廊へ通ふ駕籠昇の類をこあげと云ふなり。

*ごあんす、こなさん聞えやせんぞえ、前ば再再ごあんすして、何が恐うて逃げさんす(二枚繪)

「ごあんす」の子音の脱落した廓詞。

ごいしがしら 碁石頭に白黒の絲毛の鎧(三國志)

「碁石頭」この名の未だ他書に見當らな。思ふに兜の鉢に碁石のやうな凸形の小點數個あるものか。

こいとねり こいと煉として人もきく屋が名譽名物(千正次)

「小練」掃蕪の根を加へて煉つた餡、即ち地

黃煎である。小練地黃煎は元祿時代大阪天神の神社の前にあつて、有名な船屋の菊屋で賣つてみた。岡田侯志編「攝陽群談」巻十六、名物土産の部に「小練地黃煎。天神社衙門の南にあり、因號之、口味甚宜く、諸國の市店に送る。「菊屋が名譽名物をも見よ。」

*ごいてん あゝ障子へ雛を並べた如くにて映る影を見給へ、五音で内へ知らすれば(本領會談)

いひて目は涙、さすが五音で推量し(水月旦) その五音で殺手は知れた知れた(振袖廻)

「五音」官・商・角・徵・羽の五音をいひ、轉じて、聲色(書葉つき)

こいんじゆ 胡飲酒酣醉樂など舞樂を奏し(女護塵)

「胡飲酒」歌舞音樂略史上巻に、「胡飲酒(壹小)一名宴飲樂、或説に胡國の樂なり、胡人酒を飲む時の姿を携して舞曲とす、即ち舞人持つ所の袴は酒袴なり」とあり、一説に、仁明天皇の承和勅を奉じて樂は大戸ノ清七、舞は大戸ノ麗作ともいふ、然らば本朝に於て改作か(歌訓抄)。

こう 大事の姫が死したれば、元もこも無くなつて御褒美の段でなし(持統天皇)

「こ」(子)を「こ」と延べた語である。「元もこも」は元利也。

*ごうごう ちほのここの者ならば惜しいこと、侍にして召使ひたし

(三國志) 助給打笑ひ、ええこにも立たぬ情氣ぢやなう(卯月潤色)

なう鎌田殿、保元平治の合戦に多くの敵に向うても薄手もおおはぬ功

の武者、運盡きぬればむざむざと(鎌田) 庄司が子供は功の者、お頼もし頼もし(津戸三郎)

*ごうけん 親のこうけん是非なうて、どうなりともと言ひました(萬年草)

高位の娘でも夫が去るに何と申すぞ(曾庚申) 是非とも親のこうけん

在在所の男侍ならば、己や死ぬるが合點か(今宮)

「こうけん」といふ、權力、威光の意。蓋し「後見」の釋義であらう。

ごうさらし 「じやうし」を見よ。

*ごうしや 恒沙の眷屬引連れ(松風) 名號の六字に「ごうしや」の功德備はるなり(大原問答)

「恒沙」恒河沙の略。印度の恒河(गङ्गा)の沙數の如く無數なるをいひ、濱の眞砂といふ。同じ。華嚴經に「現在十方佛、其數如恒沙」とあり。

*ごうた 三味線小唄も古めかし(女腹切)

「小唄」俚曲の一種である。歌曲の長いものを長唄といふに對して、その短いものを小唄といふは拙則といふ。松の葉(元祿十六年刊)に唄唄を分けて、本調子二あり、三さがり及び騫ぎの四種にしてある。この唄唄は現今云へる唄唄とは別である。

*ごうたう ころたうな兄御を手本にして、商人といふ物は一文錢もあだにせず(女懸) 所帯じみて氣が

ころたう、好い女房にいかい疵(女懸) 器量に似合はぬ(ころたうな

堅くろし偏窟な生れつき(大經師) 心のたまかき(ころたうな) (歌念佛)

「公道」はなやかならぬこと。じみ。羞慚。但言集覽に「公道。おとなしきとは物の公道なる心なれば、花やかならぬをいふなるべし。」

*ごうたびくに 紀州熊野にはよき奉公の口ありと、聞くをしろるべに立越えしに、それは小歌比丘尼とて尼にするよし承り(百日曾後)

「小歌比丘尼」熊野勸進比丘尼をいふようたびくに」を見よ。

こうとう 「ころたう」を見よ。

こうにんかくしき 弘仁格式の掟。聖代の古風を仰ぎ、佛法に御歸依あり(鏡秘天皇)

「弘仁格式」三十卷ある。嵯峨天皇の勅を奉じし藤原冬頭等の編纂したもので、朝廷官府の格式規定故事舊例等を録してある。

こうのはかり 「こふのはかり」を見よ。

こうばい 紅梅竹河橋姫(淀姫)

「紅梅」源氏物語五十四帖の一。

*こうめい 幼心に孔明が昔に耳にふれつめい(女櫛)

「孔明」諸葛孔明は支那三國時代益州陽都の人である。軍略に長じ、蜀の昭烈帝に仕へて丞相となり、武侯侯に封ぜられた。曾て後主に奉つた前後の出師表は人のよく知る所である。

*こうや あつち町のこややへよつて錢とりや(曾根崎) 代代傳はる

こや屋のかたと共に売げたる頭を

おろし(重井簡) 口を止めたるころたうのり、徳様早うと出でにけり(重井簡)

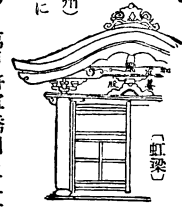
「こんや」紺屋の音便である。「紺屋の型は厚紙に漆をひいて造つたもので、小紋また紋所などを染出すに用ゐる。「紺屋糊」は紋また模様などを白抜にする所に塗る糊である。

***紺屋の徳兵衛**

紺屋の徳兵衛、房に徳兵衛も房も心中重井筒に見える人物である。假作人名部につきて見よ。

ごうりやう

「ごうりやう、ごうりやう、かへるまた、横・裏板・土・瓦、ぐわらぐわら」



***ごうろくわん**

萬戸將軍誘引にて二度歸洛ましまし、鴻臚館に入り給ひ(大船冠)

***ごかい**

それ五戒といつば、殺生・偷盜・邪淫・妄語・飲酒戒にて佛のお守り戒められた(天鼓) 此中さるお寺で五戒の割口説き聴聞した(香庚申)

***ごがいな**

上方衆は氣がよかけん、ごがいな事ばあるまい(博多) 「此工合な」の詠りつまつた語。九州一部及び

岡山縣下でも現今なほ用ゐられ、「このやうな」を「ごがいな」、「このやうに」を「ごがいに」、「そのやうな」を「ごがいな」、「そのやうに」を「ごがいに」といふ、また「ごがいな」を「ごがいな」を「ごがいな」を「ごがいな」といふ。

ごかいさん

講中が御開山へ奉る御茶所の銀ちや(二枚筒)

ごかう

五つの香交はつて四河の流れも芬々たり、今の世までも嬰兒の五香の良薬(彌陀)

ごかく

武田信玄、長尾謙信四度の戦牛角にて(川中島)

ごかし

善平白髪頭(睦合戰)

ごかち

將軍様の御重代天國・小鍛

治・義光、其外名に負ふ銘の物(雪女)

ごがねむし

やんま・とんばう・ごがねむし(小栗判官)

ごがふさい

五合ぶさい、五合ぶさいの下部ども門外につつ立ち、中にも弓削の廣海大音上げ(重徳太)

ごがらす

平家重代小鳥と云ふ太刀を佩き(鎌田)

ごぎ

今御疑をばる秋過ぎし君が代(本領曾我)

ごぎ

今御疑をばる秋過ぎし君が代(本領曾我)

ごぎ

今御疑をばる秋過ぎし君が代(本領曾我)

ごぎ

今御疑をばる秋過ぎし君が代(本領曾我)

ごぎ

今御疑をばる秋過ぎし君が代(本領曾我)

ごぎ

今御疑をばる秋過ぎし君が代(本領曾我)

今御疑をばる秋過ぎし君が代(本領曾我)

ごぎ

今御疑をばる秋過ぎし君が代(本領曾我)

ごぎ

今御疑をばる秋過ぎし君が代(本領曾我)

ごぎ

今御疑をばる秋過ぎし君が代(本領曾我)

ごぎ

今御疑をばる秋過ぎし君が代(本領曾我)

ごぎ

今御疑をばる秋過ぎし君が代(本領曾我)

ごぎ

今御疑をばる秋過ぎし君が代(本領曾我)

ごぎ

今御疑をばる秋過ぎし君が代(本領曾我)

ごぎ

今御疑をばる秋過ぎし君が代(本領曾我)

ごぎ

今御疑をばる秋過ぎし君が代(本領曾我)

三筋町上林が内ではみやと、五度所を變へ五度替名して流寓したことをきかせたのであつて哀れが深い。

こきやからうーごけ 西の海にさらりてらりやう(喜女)

こきりこ こきりこば放下に採まる(用文章)

こくろさう(嵯峨天皇)

こくがね 宗味が刻鐘の開眼、粗相な非時致します(青庚甲)

こくしやう お汁は家鴨の油揚、豚のこくしやう羊の漬焼(國性齋)

こくしん不死 西王母が園の桃を食ひ、こくしん不死の仙術を得(西王母)

こくろさう(嵯峨天皇)

こくがね 宗味が刻鐘の開眼、粗相な非時致します(青庚甲)

こくしやう お汁は家鴨の油揚、豚のこくしやう羊の漬焼(國性齋)

こくろさう(嵯峨天皇)

こくがね 宗味が刻鐘の開眼、粗相な非時致します(青庚甲)

こくしやう お汁は家鴨の油揚、豚のこくしやう羊の漬焼(國性齋)

こくろさう(嵯峨天皇)

こくがね 宗味が刻鐘の開眼、粗相な非時致します(青庚甲)

こくしやう お汁は家鴨の油揚、豚のこくしやう羊の漬焼(國性齋)

こくろさう(嵯峨天皇)

こくがね 宗味が刻鐘の開眼、粗相な非時致します(青庚甲)

こくしやう お汁は家鴨の油揚、豚のこくしやう羊の漬焼(國性齋)

こくろさう(嵯峨天皇)

こくがね 宗味が刻鐘の開眼、粗相な非時致します(青庚甲)

くちぞい(生玉)

こくろさう(嵯峨天皇)

こくがね 宗味が刻鐘の開眼、粗相な非時致します(青庚甲)

こくしやう お汁は家鴨の油揚、豚のこくしやう羊の漬焼(國性齋)

こくろさう(嵯峨天皇)

こくがね 宗味が刻鐘の開眼、粗相な非時致します(青庚甲)

こくしやう お汁は家鴨の油揚、豚のこくしやう羊の漬焼(國性齋)

こくろさう(嵯峨天皇)

こくがね 宗味が刻鐘の開眼、粗相な非時致します(青庚甲)

こくしやう お汁は家鴨の油揚、豚のこくしやう羊の漬焼(國性齋)

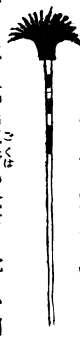
こくろさう(嵯峨天皇)

こくがね 宗味が刻鐘の開眼、粗相な非時致します(青庚甲)

こくしやう お汁は家鴨の油揚、豚のこくしやう羊の漬焼(國性齋)

こくろさう(嵯峨天皇)

こくがね 宗味が刻鐘の開眼、粗相な非時致します(青庚甲)



毛は筑前福岡の御城主(薩摩歌)

こくろさう(嵯峨天皇)

こくがね 宗味が刻鐘の開眼、粗相な非時致します(青庚甲)

こくしやう お汁は家鴨の油揚、豚のこくしやう羊の漬焼(國性齋)

こくろさう(嵯峨天皇)

こくがね 宗味が刻鐘の開眼、粗相な非時致します(青庚甲)

こくしやう お汁は家鴨の油揚、豚のこくしやう羊の漬焼(國性齋)

こくろさう(嵯峨天皇)

こくがね 宗味が刻鐘の開眼、粗相な非時致します(青庚甲)

こくしやう お汁は家鴨の油揚、豚のこくしやう羊の漬焼(國性齋)

こくろさう(嵯峨天皇)

こくがね 宗味が刻鐘の開眼、粗相な非時致します(青庚甲)

こくしやう お汁は家鴨の油揚、豚のこくしやう羊の漬焼(國性齋)

こくろさう(嵯峨天皇)

こくがね 宗味が刻鐘の開眼、粗相な非時致します(青庚甲)

ごげざや 身ばかり買うて去なれた
〔後家鞘に極まつた(女腹切)〕

***ごげざや** 美しい黒髪を此様にそり
りさげて、手足は山のこげざるぢや(丹波興作)

髪を細つた髪。「こげは」瘦せこける。「根がこける」などいふ。「こげ」同じ語で、肉落ち細つたをいふ。狂言「花子」に、「人の妻見て吾が妻見れば、み山の奥のこげ狼が、雨にしよぼぬれて、ついつくばうたにさも似た。」(和訓栞)に「こげざる」編纂の義にや、群狼の中にはねだされて獨りになりたるをいふ」とある説に従はなぬ。

こげのたもと 頭陀乞食に身をなして、昔の袂も恥ならず(大鷹虎)

〔苦袂 羅薛の衣といふこと、隱者の服である。よつて以て僧衣に通はせて用ゐる。古今集 哀傷部 僧正遍昭の歌に「みな人は花の衣になりぬなり、昔の袂も恥にせよ。」〕

***こげらふき** あぶなや轉びこげらふき(蛙合歌) 又この上に盗人と名をやうつまんこげら葺、昨日の雨のかばかめに(大經師)

木削屑の義。袖または襦などの薄板を以て葺いた屋根。

ごけん 君は右大臣の左大將馬寮の御けん、尤も馬を御覽ある御位にて候(融大臣)

〔御監「ごけん」とよみ、又「馬のつかさ」ともいひ、馬寮の長官で左右各一人、近衛大將が兼帯し、御監の事を總括する職。〕

***ごけん** またのこげんをまつかし(女腹切) 思ひまゐらせ候、べく候、御見の如く二世三世、くされく

れと血判をすゑた小舌たるい女子文(萬年草) いよしもかはらぬごけんまで、逢瀬を契る餅(杵杵)

季武進み出で、ようようどうもどうも鬼の娘に御けんもじ(堀山姥)

〔御見「御見」の略、おめいよじ「ごけん」は女の手紙文に多く用ゐられた。「御見もじ」は御見登の文字詞である。文字詞は足利時代の末期朝野式微にして供物の物備はらなつたため、女官等の名を呼ぶを忌む何文字とらうた體語から起つたと云ふ。〕

ごご 一 おごごに見よ。

ごご 萬民五袴の悦に耽り(嵯峨天皇)

〔五袴「五袴も蓄へてあるといふこと、民の富めるをいふ。後漢書 廉范傳に「范字叔度、字通側、舊制禁民夜作、以防火災、而更相隱蔽、燒者日聞、范乃毀削先令、但嚴使、誅水而已、百姓爲便、乃歌之曰、廉叔度來何暮、不焚火、民安作、平生無五袴、今五袴」と見えたる。袴は袴と同じ。七行の古語本に「五袴」とあるは、袴と袴と字形の相似より誤つたのである。〕

ごご 髭と髪とは香爐の雪、五湖の波また面の皺唐船斷 實に古も五湖に浮べる船の内、それば功成り名遂げ身退きての樂しみを羨むばかり(大覺)

〔五湖「群賢皆唾には、太湖、謝陽湖、洞庭湖、丹陽湖、富春湖」をいふと見え、張翥吳錄には「五湖者太湖之別名、以其周行五百里三萬六千頃、故名五湖、美と見えたる。五湖の波」とは面の皺多きを形容したのである。大覺大僧正御傳記のこの文は、陶米公(范鑑)の樂しみの故事をいうたのである。説公(范鑑)の「五湖」は二度代をとり會稽の恥を雪ぎし

も陶米功を成すとかや、まれば越の臣下にて政を身に任せ、功名身貴く心の如くなるべきを、功成り名遂げて身退きては天の道と心得て、小船に挿きて五湖の遺風を樂しむ。

***ごご** 仁義五常の五銚の形(鶴丸)

〔五銚「金剛餅の一種、兩端五股より成り、密教の修法に用ゐる器。金剛餅は印度古代の武器で、能く物を破壊するが故に、密家では煩悩を破壊する善提心の表徴となし、金屬で作つた。〕

***ごご** 頼も股肱の郎等、別府の郷武者雲足(百合若)

〔股肱「股、肱の如くに頼みとする者。書經 益稷に「帝曰、臣作股肱耳目」。左傳に「君之卿佐、是謂股肱」。〕

***ごご** 某は虎口の讒言にさへられ流浪の身となり候へども(三世相)

さかなきこころの讒言によつて、鎌倉殿と御兄弟御中不和の(源義經)所謂探虎口者也」とありて、極めて危険の義、轉じて、身の成敗の分れる所の意にさふ。恐怖すべきこと、こころをも併せ見よ。

***ごご** 民衆昌の恵によつて、五穀豊饒に打續き、萬萬年とぞ祝ひける(國性徳)

〔五穀「楚辭註に「稻、稷、黍、豆、粟」を云ひ、孟子註に「黍、稷、菽、麥、稻」を云ひ、禮記・月令に「黍、稷、麻、麥、豆」を云つてある。轉じて、廣く穀物をいふ。〕

ごご 七五三、五五三、山陰中納言の家の切りかた、料理一通りは承り傳へしゆ(翁庚申)

〔五五三「五五三の饗膳。七五三(その條を見よ)の饗膳を略して、飯にても湯づけにても五の膳まで出す。〕

ごご ちしごを見よ。ころえたるべはばさま そんなら道ちや駕籠へもちよつと寄つてくれ、心得太郎へのげば様と、喚いて使は歸りけり(重井筒)

〔心得「心得た太郎兵衛の婆様」にいひかけた口合である。太郎兵衛の婆様に「意味があるのではない。これと同じやうな言ひ方に、庄兵衛のばばさまといふ詞が役者九はんだか(延寶二年刊)及び御前義經記元祿十三年刊)に見え、某林子作の今宮心中「公のばば」といふ詞も見えてある。「何のばばさま」「何のばば」といふこと、當時口合に添かへた流行詞である。現今も福山口に「さうさう」といふことは知らないといふ意に「そんなことは知らぬねこはば」といふこと、類詞である。また心得た太郎兵衛といふことが、心得たといふことの口合である。長町女腹切中巻に「それ男ども追出せ、心得た太郎兵衛、長兵衛、五助」と見えてある。曾我孫八景中巻に「それ甲し付けよといひければ、心得たんば」といひ、心中刃次明日に「内業酒の棚しなれ、……、といひければ、心得たんばを遺生婆」とある。〕

この心得たんばは、心得た太郎兵衛をたんにさひかけたのである。

***ごご** 清盛が軍慮心にくき、とも候はず(鎌田) 守屋が弓矢何程の事がある、心にくきは川勝一人聖種(孝子)

〔心憎「憎ら思ふほどえらひ。奥ゆかしい。保元物語、爲朝軍評定の條に、「主上の御方心にくく、こころ候はず。〕

***ごご** 心の駒、心の駒の諸手綱、ふさが思ひの通ふ(や) (重井筒)

情急の制し難や馬の馳を狂や制し難いのに譬へた詞。本朝傳記に「七歌に、ひかれな

ばあしき道にも入りよへし、心の駒に手綱ゆるすなとあつて、誰にいふ「心の駒に手綱ゆるすな」の應用。

***ごさくらつづ** 律義を我身の奉公にしてお爲にならうと存ずる一念、五臓六腑に染込んでお主を大事に存じまする(流鏑) 五臓六腑を吐出し、鐵の熱湯が咽を通る苦しきより(錦標)

【五臓六腑】五臓は肝・心・脾・肺・腎を云ひ、六腑は膽・胃・大腸・小腸・膀胱・三焦をいふ。轉じて廣く「はらわたし」をいふ。

***ごさくらおとし** 白糸絨しらしらと東雲いそぐ小櫻の、盛りの春さたのもしき(用明天皇) 小櫻を黄に返したる鏝(大原問答)

【小櫻絨】絨は繕通とも威の義とも云ふ。藍地に白く小櫻の花形を染出した革を小櫻革といひ、その革で綴じた鏝を小櫻絨の鏝と云ふ。小櫻革を黄に染返したため、綴じたものを「小櫻を黄に返したる鏝」といひ、地色は朋黄に似、鏝は黄になつてゐる。

ごさくらふね 「ごさふね」を見よ。
ごさね 「ごさね」を見よ。

***ごさね** お二人まめで中好うて、随分無事でござ船で、迎に參る男涼しき川風は、秋といひても嘘でないよの(今宵)

【御座船】川御座をいふ。その様を見よ。【ごさ船】は海難混雜に御座船をひかけたのである。

***ごさめれ** 顔を見れば是は扱鐵葉黒に色白し、まさしく平家の御公

達ござめれ(手観集) これこそ天晴開き及ぶ淨瑠璃御前ござめれ、何卒すかして宿を借り(源義經) よい敵ござめり(倉橋出)

【ごさめれ】のつまつたものである。されば「ごさめれ」は「ごさめれ」であるべきである。序に云「ごさ」は係結につき、その末を結ぶに第五用の終止法を用ゐるのであるが、そのはじめは條件文に用ゐられて接續の助詞の略されたのが、自然第五用を以て結ぶものとなつたのであらう。「めり」はやうに見えろ」といふ程の意で、現在の推量を示す助動詞である。

***ござりんす** くりや旦那さんで御座りんすか、内方に居さんす半七殿にちよつと逢ひたい御座りんす(女腰切)

【御座りんす】を訛つて「ござりんす」また「ござんす」ともいふ。駢詞である。「りんす」をも見よ。

***ござんなれ** これはなかうどいらすの新枕ござんなれ、互の初恋おもはゆからん(用明天皇) あれば敵盛綱の居間ござんなれ、幸爰に弓矢もあり(佐佐木) へてに屈竟の時節ござんなれ、かまへて人に悟られ給ふな(世世景傳) 扱こそ變化ござんなれ、いで物 扱こそ變化ござんなれ(振袖始)

【ごさめれ】のつまつたものである。【ごさ船】は海難混雜に御座船をひかけたのである。

***ごさめれ** 顔を見れば是は扱鐵葉黒に色白し、まさしく平家の御公



る(きんこ)をも見よ。
ごじ 一條院いまだ七歳の幼主として、五事七政を秋津洲に施し給ふぞ有難き(關八州)

【五事】親・善・禮・節・思をいふ。蓋し五事は修身の要である。人君敬み其身を修めんと欲するに五事を用ゐる。書經・洪範に「敬用、五事」。

ごじ 華嚴寂滅だうぢやうに始り法華涅槃に書き終る、其中間五時八教百日會釈

【五時】釋尊一代の説教を五時に分つ、即ち華嚴經に三年、阿含經に十二年、方等經に十六年、般若經に十四年、法華經に八年を賈れたと云ふ。華嚴經にて中目に口説き云云をも見よ。

こしがはり あれあれあその桔梗染の腰變り縞縹の帯、しやぢやわいの(女殺) 裾裾の紋は松皮菱、鱗形の腰變り(薩摩歌)

【腰變り】腰のあたりにて染付た着物。
***ごしよ** 伍子胥が吳王を諫めたる金言よりなほ重し(船山楚) 李踏天が眼を抉りしは伍子胥が餘風(國性爺)

【伍子胥】吳王夫差の臣である。周の敬王二十六年吳王夫差が越王勾踐の軍を夫椒に破る、勾踐餘兵を以て會稽山に棲み降を請ふ、子胥乃ち吳王に勾踐を殺すべきを諫白して用ゐられなかつた。大宰嚭・子胥を齎したので、夫差・子胥に屬する舟を賜うて切腹を命じた。子胥その家人に告げて言ふに、必ず我墓地に棺槨を植えよ、吳王が勾踐と戰敗れて死なれた時の棺材にならう、吾目を抉つて東門に懸けよ、越兵が吳を滅すのを見るであらうと、

言ひ終つて自刎した、かくて伍子胥の言の如く越遂に吳を滅した。
***こじたるい** くされくされと血判を据ゑたこじたるい女子(萬年草) 下地がにやこい旦那様、こじたるうしかけたらばつかりと食附いて、田もやらう畦もやらう(夕霧) ええいやらしいこじたるい(露門松)

【小生醫】でれでれしい。體氣らしい。
***こし** 牛膝・あかりも二十日草・鼠尾花・末摘花のこの草を取つて満月の夜の露を搾つて與ふるに、形碎けて消ゆると見え(用明天皇) たれども(用明天皇) 年々

生草本、根は藥用となる。元祿太平記(元祿十五年刊) 卷之一に「牛膝の和名をいひのこ」ちとらへは、四年中故事要言(元祿十年刊) 卷四、草合并圖子鼠の條に「牛、膝は胎を傷り、溼寒重藥は毒藥なるが故なり。」
こしはう 精進落つるこれ見よと、小四方引寄せ昆布に添うたる厨斗ひつつかみ(娘)

【小四方】足打折敷をいひ、四方に孔あるから。厨斗、書言字節用集に「小四方。小盤也。俗云足打」。

***ごじふにるゐ** 五十二類も佛果を

見よ。



【膝 牛】

現じ(霧迦) 鳥類畜類五十二類涅槃の庭に泣沈み(霧迦)

【五十二類】一切の有情を五十二種に分類して、大般涅槃經・序品に説く。五十二類は一切の有情をいふ。謠曲・總に、「有情非情皆共成佛道、願むべし願むべしや、五十二類も我同性の涅槃に引かれて」。

*ごしやう 蒲團張りして小姓衆を乗せて(堀川波鼓) 御家の若旦那殿様よりお小姓に召出され(薩摩歌) がかはもと御前様の奉公人、與作殿は奥小姓、五にわかきの戀風に(舟波與作) お寺小姓のち(櫻(萬年草) お伽小姓の頑是なし十二三

なが手を揃へ(舟波與作) 表小姓の數數の中にも笹野權三とて(鎗權三) 傍輩は皆小小姓の額を赤めて挨拶せず(萬年草) 通ばせ文を御次に落し、小姓目付に拾はれ(舟波與作)

【小姓】貴人の側に給仕し、煙草盆・お茶・お水など總て膝許の用を辨じるので、年配十三四歳の者がこの役に多い。

【奥小姓】は奥勤めをする小姓。

【お寺小姓】は寺院に仕へたる小姓。

【御伽小姓】は將軍大名或は世子などの幼い頃、その側にあつて從然の折の相手となる小姓。

*ごしやう 五障の雲に埋るる 女入堂にぞ着きにける(萬年草) 女は五障三從の重きがうへの憂き思ひ(女護島)

【五障】女人は罪業深くて五つの障を有すといふ。即ち一に梵天王、二に帝釋天王、三に魔王、四に轉輪聖王、五に佛身と成ると云ふ。女人はこの五障ある上になほ三從として自由を制するものがある。即ち一に幼には親に從ひ、二に長じては夫に從ひ、三に老いては子に從ふ、これを「五障三從」と云ふ。謠曲三井寺に「我も五障の雲はれて。平家物語 蒲頂雲に」添くも彌陀の本願に乗じて五障三從の苦を遁れ。

*ごじやう 孔孟教を垂れ給ひ、五常五倫の道今に盛んなり(國性館) 日本五常の寶を奪ひ我威を振はん(松風)

【五常】仁・義・禮・智・信をいふ。白虎通に「五常者何、謂仁義禮智信也」また劍は五常の徳を具備するといふ意より、日の御座の寶劍を「五常の寶」といふ。

ごしやう まあまあ下女の竹でもこしやらいで、お腹に胎兒を宿しては寝起き立居がなほ大事(三國志)

【越しあるの歌】「あが」に「散るは」きりあひ「切合を」きりやひ、「りあひ」(入相)を「ちりやひ」とふの類である。ごしやうらで「は」ごしあらで「即ちよこさないで」の意である。

ごしゆいん 「しゆいん」を見よ。

五乗 三乘五乘七方便四種八部二十有五有、善く利益の甘露を管め(霧迦)

【五乗】は五乘である。因人を顧せて證果に運ぶ乘輿といふ意であつて、佛の教道をいふ。五乗とは聲聞・緣覺・菩薩・人間天上の五乗を云ひ、よつて以てこれ等の果を得べき五種の衆生をさす。

ごじやく やい若い者ども此處な小

じよくめを知つたか、終に仲間で見なれぬ奴(孕常盤) やいごじよく今度ばこれを食ふかと、杵振上ぐれば(杵杵)

【ごじよく(小職)】の歌、見習弟子の義。こわつば(小童)のこちらは小女童(浮世床)一上つて「あとかから小ちよくは供をしながら、振かへりて照にからかふ。俳言集覽に、「ごじよく」女兒を云、これ大かたは婚家の詞也。

*ごしやうめ 京羽二重の御所染・三栖屋針・手縫箱(浦島)

【御所染】染色の名。上品な散し模様を染出したるもの。菊岡沿源撰 本朝世事談綺・卷一、衣服品に「寛永の御女院の御所に好ませられ、多くの箱を染ませられ宮女つづままでに賜はる、此染京田舎にはやりて御所染と云ふ。三宅也撰 萬金産業袋 四、夏物の條に、「平御所染 地白にして總地はな色、かたにてり柿・黒柿・扇實などの小色を所に入れ染る、ひがきに菊・龍田川の形、これを上方にては地白染と云ふ。又右の小色なしに染るもあり、或は形を鼠・白茶・黄茶等の一色にて染るもあり、又地染り名物あふぎ染の類もあり、是等は近代の出来事なり。龍大臣 第二に春の名織の觸染、うつつ色の御所染」とあれば、薄黒い染色もあつた。

ごしよのひんぬき 段模様染被衣、供の女が頬冠り、御所のひんぬき二人が中へ(女用訓載)

【御所の引被】御所風即ち貴族風のきつるひんぬき。被衣などの條を見よ。

ごして 赤繪吳洲手の錦皿下し賜はつてこれで食ふ(會稽山)

*ごじり 琥珀の欄干・瑪瑙の瑤(松風) 中が赤鯛の鱗が、そこの博多(博多) 小後の義。垂木の端をいひ、そこにある飾。また刀那の鞘の尻首をいひ、つぎ。

ごしをらうた 公家ならば公家のやうに、柿本の流なくみ腰折歌でもよまずして(女備) 先を急がぬ旅ならび、この浦山の名所をば、訪うて眺めて道の(蛙合) 腰折歌の一首をも詠まば(鎌倉)

【腰折歌】歌の上の句と下の句と意の相合はぬ拙悪な歌を云ふ、以て自作の歌の謙稱にも用ゐる。腰折の三十一期は、腰の抜けたこと一歳をいひかけたのである。

ごしんいん 俄に觀念を改め護身印を結んで、うつまま明王五大尊の法を責めかけ(白鳥遊)

【護身印】眞言宗にて行ふもの、行者の身心を堅固に守護し、一切の惡魔を退ける爲に結誦する印契であつて、その陀羅尼や觀念には口傳がある。

ごしんぼち 「しんぼち」を見よ。

ごして 赤繪吳洲手の錦皿下し賜はつてこれで食ふ(會稽山)

【吳洲手】藍色に黒みある支那製の陶磁器。遊樂堂二下、器用部に「吳洲手。萬寶全書、染付の懸しきを名付けたり、手のよきを子鳥といふ、其うらなればごすてといふと、ぞ、新安手前にも、ごすては子鳥を打返して手の懸しきを申すことと申候、是等も京都將軍の世俗語と聞え候とあり、さるるも都府の世のど、畫樓書をごすと云ふ、磁器の青繪なり、



【風所 襦】

よく製法して繪をかき、釉水がかくれば青色となれども、もと色黒きもの故、釉水からかぬ處は其色黒し、故に藍色の黒みある陶器なればごす手といひしを、謎の名のやうに取なしたるもの歟。

ごすもじ 「ごすもじ」を見よ。

ごすもじ その天人の五衰より人間に八苦あり(梵符)身に任せれば天上の五衰の花も散るとかや(持統天皇) 天上の五衰より北州の千年も弘徽殿

ごすもじ 天上は快樂極りなれども、これも永遠のものにあらずして五衰として果報滅盡の相がある。往生要集に「如彼初利天、雖三快樂無窮、臨三命終時五衰相現、一・頭上花鬘忽萎、二・天衣塵垢所著三・腋下汗出、四・兩目散射、五・不樂本居、是相現時天女眷屬皆悉遠離棄之、如草履臥林間、悲泣矣。」詠曲、羽衣に「涙の露の玉鬘、かざしの花もしを」と、天人の五衰も目の前に見えてましましや。「天上の五衰より北州の千年云云は」過去をんをんの昔云云」を見よ。

ごすもじりゅう 小水龍といふ名管は天曆の帝の御寶物、國に怪しみある時は吹かぬに己れと音を出す神妙あり(雲女)小水龍といふ御笛、天曆の帝勅筆の銘ありて(雲女)「小水龍」横笛の名。拾芥抄に「小水龍。江記曰。天曆御笛寶物」。

ごすもじ お春にござ殿一節頼むといひければ(今宮) (御前)首御前の略 警女をいふ。三味線などを置き唄を誦うて鏡を乞ふ盲女。人倫訓蒙圖(養元祿三年刊)に「御前。光孝天皇の御子

雨夜の前にはじまるといふ説あり、これも歴の奥方へも出入又はいとなげなき姫子に等、三味線を教へれば、身持ちやしやにありたきものなり。

ごせあふみ 巨勢あふみが畫きたりし淺さは水の杜若(大掛物)「巨勢相説畫師にして巨勢金岡の子。和漢音釋書言字考節用集に「金岡(字多胡人。巨勢氏、從五位下采女、工書圖、其三子：相賢、公忠、公喜共承業佳聲)」とありて、相賢に「アフリ」と例訓してある。

ごせつげ 禁裏・院中・親王・五攝家・清華の御方(大經師)「五攝家」近衛九條二條一條廣司の五家であつて、攝政關白に任ぜられ條を得た家筋。

ごそだい 強吳忽に亡びて 姑蘇臺の露荆棘にうつる(千鶴集)「姑蘇臺支那春秋戰國時代、吳王夫差が美女西施を寵して姑蘇臺を築き、その上で遊宴したが、彼に越の爲に亡され、その上で遊宴した。江蘇省吳縣の西南に姑蘇臺の遺跡がある」と云ふ。史記、吳世家に「吳王夫差、越、越進西施、諷退軍、吳王許之、既得西施、甚寵之、爲築姑蘇臺、高三百丈、游宴其上」と云ふ。

ごそはあ 乳のあたりへ手をやれば、あそこそはあ、またしてはまたしては抱付いたり手をなしたり(大經師)「そはあ(養理の「ば」を延べて「ゆ」を略した語。くすつた。

ごたい 五體の涙しめよせて(二枚繪) おのれが五體どこを不足に生付けた、人間の根性なげさげ(女殺) (五體)筋、脈、肉、骨、皮毛、或は頭、兩足、兩手

を云ふ。轉じて全身をいふ。
ごたいそん 五輪五行に五大尊(簡井)「五大尊」五大明王を云ふ。次條を見よ。
ごたいみやうわう 内にこめたる五大明王・六觀音・七佛藥師の御産の守(安夫池)

ごだいらき 袖から渡す一結び、片假名の見ゆる(三世相)「五大力」冥界から元元頃にかけて、手紙の封に「五大力」又は「五大力菩薩」と書くことが流行した。五大力は金剛明・彌王明・無畏十力明・雷電明・無畏力明の五菩薩力であつて、これを執金剛神または住吉真の院天部の神に當てられてもある。傾城屋や遊女の輩は密教僧仲者が多いので、纏城に五大力または五大力菩薩と書いたのである。蓋し五大力菩薩の力で結んだものは、その封が解けぬと云ふ呪であつて親展を意味するのである。後世になつてはこれが轉用されて煙管・小刀のやうな物に五大力と刻込むやうになつた。西船撰、日本永代藏(貞享五年刊)巻一に「封じ文一通拾上げしを取りて見れば、花川様まゐる。二三よりと裏書き、そくし附けなから念を入れて印刷捺したる上に、五大力菩薩とせめざめと筆をうごかせける。立身一通帳(元祿十六年刊)巻之五に「封じたる狀を一通拾上げ、うは書を見れば大阪の商人より京の商人へ急用をいひ遣す」と見え、裏に五大力菩薩として即ち時あり。伊達裏五人男(寶永四年刊)巻二に「又逢ひたいと書きまゐる」後反古染、五大力菩薩のうは繪にもくからぬ命毛。傳奇作者拾遺に「五大力とは神か佛とかの名にし

て、既に住吉神官等に在て、其頃のやはり神なり、狀の纏じ目に五大力と書て送る時は、他見を感て滞りなく達するとして其領事ら流行しけり」。

ごだうし 異國には吳道子が繪、主の僧をなやませし(關八州)「吳道子吳道玄字は道子、唐玄宗皇帝時代の名である、畫法妙を得、曾て寺僧を訪ふ、僧禮しなかつたので道玄驢に懸を畫く、夜その驢動き出したて僧其を踏み毀したといふ俗傳がある。

五道の冥官 上は梵天帝釋、下は四天王閻魔法五道のみやうくわ入(用文章) 人目には見えぬども、地獄・餓鬼・畜生・人間・天上の五道の衆生を常に照覽する神。佛説地藏菩薩發心因緣十王經に「取す於罪人、觀罪障上科自如故、亡人閉口造惡變面、訪羅下之佛、動鏡會赤紫冥官、聖神書」。
火燧開けた祝儀 一昨年の十月中の亥の子に火燧明けた祝儀とて、まあ爰で枕並べた此か(天綱島) 火燧は十月支猪の日に開け、内祝をしたものである。薄櫻雜談、正徳三年十月の部に「火燧切(亥日)和給の燧を開き火燧を切るに亥日を用ふる事、これ火災を除るの謂なり、亥は極陰のものなり方なり、此日支猪を亥の爰を以て祭るなども、彼神は陰神にて亥の爰に鎮座す、故に亥の子に火燧を開くなり。」

ごだん 其目もやうやう併食のごだんの吸物ばや歪も満潮の(五人兄弟) 後段客のものなしに、飯の後に呑類にても何にても出すを云ふ。飯々雜記、卷六、飲食之部に「客のものなしに、飯の後に呑類にても何にても出すを、今の世には後段と云ふ、古はなき詞なり、飯の後に又は前にも、いか

程も食物を出してもてなすを幾こんと云ふなり、是古の詞なり。

*ごちよと 「ごちよと」が百錢落いたとも思はぬ程の身代なれども(飛騨)「ごちよと」(此方)の略か。自分どもわれら

*ごちゆうらうてん まんまと法然上人が彼方の十念授かり、諸分けの五重相傳受け、四十八夜の常念佛互に忍び忍ばれで(薩摩歌)

五重相傳は淨土宗で行ふ法儀で第一重 選擇集、第二重 授手印、第三重 願誓鈔、第四重 決答疑問鈔、第五重 論註の要文の口傳を師から受けるを云ひ、この宗で祇傳とする所である。この文にあるはかう云ふ義ではなくて、五重相傳は淨土宗の祇傳をいうたのである。傾城禁短氣にも「女郎買五重相傳」などの詞が見えてある。

*ごちよく 「ごちよく」を見よ。假の宿を何時までも、五濁に迷ふ水泡の、轉た迷を導きて(觀迦)

「五濁」劫濁・煩惱濁・衆生濁・見濁・命濁の五種の渾濁不淨を云ふ。法華經方便品に、「諸佛出於五濁惡世、所謂劫濁・煩惱濁・衆生濁・渾・命濁。」

*ごちんぎ 「ごちんぎ」を見よ。は半時も側に置かれれば損のやうに破附いてあたまさうな(生玉)

「ごちんぎ」かどかどし。武骨し。縁黨方言者に「上方にてかどかどしきをごちんぎ」は云云「現今も紀州東牟婁郡あたりには、武骨しを「ごちんぎ」と云ふ。

程も食物を出してもてなすを幾こんと云ふなり、是古の詞なり。

*ごづか 榎柄になさるるなと、もぎ放せばごづかを取り引伏せ(卯月杵)

互にごづかを取つては投げつけ(丹波興作) おゆらは夫太四郎がごづか胸座掴み合ひ(酒吞童子)

ごづかを取つて引ほき叩附け食附きし、齒ぐきの血しほ血の涙(用明天皇)

筋を掴み引ちり(言岡染) 「もとどり(響)をいふ。かみづか(髮束)を「かんづか」か「かうづか」といふ。「ごづか」と轉訛したので、「かみより(紙張)をかうづか」といひ、「ごより」といふのと同じ類である。安原眞猿傳かた言(慶安三年刊)に、「かうづかごづか」

*ごりから 面體骨柄寸分相違なき上(最明寺殿)

骨柄はねぐみのやま。容姿。ごきやごころ 西の海へ打投げろ(ごきやごころ) 雪女

「ごきやごころ」といふ。その條を見よ。ごころい さてもお目利今極め、ごころい打つて私儀は銀座に長長使(これ(薩摩歌))

「ごころい」(極印)の書便記。金銀貨幣に發行所量目などの文字、標目等を打込んで證とする、これを極印といふ。

*ごちやう 嘉平次様といふ人は嘘(ごちやう)の骨張(生玉)

「骨張(骨子)本本の義。最上第一の意にちひ、多くは悪し」といふ。源平盛衰記・關卷第四、白山神興臺山の條に「中宮の大衆の中に智積、慶明、佛光等の骨張の輩六人云云。傾城太大神樂寶永二年刊)卷一、心中兩手繩の條

に、「坊主の四郎兵衛、春駒の善七などいづれも馬鹿の骨張。」

*ごつていうし 今宵は猪の七年物、ごつていうし程なをしてやつ(持統天皇)

「ごつていうし」(特牛)の音便歌。特牛をいふ。「ごつていうし」は物を賣ふに強い義。箋注倭名類聚抄卷七に「特牛。赤色立成云特牛(俗語)云古止比、萬葉集、牡牛訓三已止比字之、又事實乃牛亦是、本居氏曰、古止比、殊實也、訓三つていうしは誤。」

*ごつてんわろ 強きを破り剛きを割り硬きを砕く牛頭天王、末世の惡魔疫神を防ぐ神威ぞ有難(振袖始)

牛頭天(巴)葉葉鳴尊をいふ。印度の忿怒鬼神(Gavariya)譯して牛頭を葉葉鳴尊に附したものだといふ。或はまた日本書紀に、素戔鳴尊(神)土曾戸茂裂に赴き給ふとあるによつて、牛頭は韓國の地名「ソマリ」であるといふ。京都の八坂神社はこの神を祀つたものである。

*ごつばふ 韋胡蘇(的矢)一手入るは侍所瀧口の骨法(會稽山)

「骨法」禮儀作法の筋道。源平盛衰記・和卷第十三、高倉宮信連の條に「衛尉の官をけがす侍に細附けんぞ申し行ひつる事無下に骨法を不知りぬ。」

*ごつばとけ 常常氣立が結構で、お宮とは言はず佛佛と申したに、可憐佛をやくたいもない骨佛にして除けた(反魂香)

「骨佛」人の死體の肉脱落して白骨となつたもの。死體を火葬した骨灰。

この刀(天綱鳥) 小詰役者(小部屋に詰込んで居る端役者をいふのが轉じて、下廻りの役者(俳優)をいふ。人倫訓蒙圖彙・七に、「小詰。歩若者若業をほじめ、一切人にきて自身得をせざるをいふ。」

高手籠手に縛付け(出世景清) 高手の繩をつつまつつと喰ひ切れば、小手の繩もゆるまりて(睦合戦)

*ごつうけさ 下は墨染五條袈裟(會稽山)

「五條袈裟」三衣の一、安陀會の法衣。ごつうし 序破念の三段に五調子をしらべ(三世相)

「五調子」堂越(宮)、平調(商)、雙調(角)、黄鐘(徵)、蕤(羽)。

ごつうはい 早新玉の四方拜節會(薬子・小朝拜(百合香))

「小朝拜」正月元日清涼殿の東庭で殿大のみ拜舞の禮を行ふをいふ。

胡敵の一足 枯木の枝によるよろよろと、今は胡敵の一足と、かちしも俊寛が身に白雪の(女護鳥)

昔は嚴羅の湖に籠められて云云を見よ。ごつまり 縦・南に小手毬に、いとし男と射子の(生玉)

「小手毬」庭園に栽培される灌木で高さ三四尺に達す、葉は長橢圓形で鋸齒を有し互生す、花は小形白形で腋生花序に排列す。

ごてんやぐ 「ごてんやぐ」を見よ。

ことごとがしは 目今の勝利にことごとの天罰受け

人より疾く歸れと呼はりける松風 すぐに城をやるべき、陣を堅めてことごとを待たせよ

毒より速かにて(開八州) 毒物である。左傳疏に「以毒藥藥人令其不自知者、謂之蠱毒」

ことごと 鐵棍・刺股・もぢり・琴柱(開八州) 琴柱琴柱様のこと、尖端が琴柱を逆にした形であるから云ひ、刺股の別名である

ことごと 琴の組でも諸ばいで、誰に習うてばでな歌、姫様などに教やんな(舟渡與作)

ことごと 琴の組の略。嬉遊笑覧に「組といふことは三弦の曲より出、おなじ趣の小歌をよせ聚めたるを組といふなり」

ことごと 琴の音 我は澄渡る此海面の松風

の琴の音に眼を覺し(浦島) 松籟をいふ。拾遺集に「松風入夜琴」の題にて齋宮女御の歌に「琴の音に峰の松風通ふらし、何れのをより調をせめけむ」と見えたる。琴の音を松籟にいふことこれらから出た詞である

ことごとがしは 節季に寄らぬ銀の過ぎた例は無い、今日暮れから渡さうと言葉つがう(女殺)

ことごと 酒、そのあとへ打入飯六ヒツツ、珍しいお腹でないか(符統天皇)

ことごと 五斗味噌 唯樂軒撰立身大福帳(元祿十六年刊巻六に、「五斗味噌。大豆一斗、糴一斗、ぬか一斗、粕六貫匁、醬油粕六貫匁、鹽五升、右の通にすべし、久しくなる程よし、但しぬかをむしてもするなり。但書書覽に、「五斗味噌。米の糠五斗、大豆一斗、米麴三升、鹽五升、右摺合せて三十日過て用うべし、一名サザンといふ。按ずるに製法は一定してないが、五斗味噌の稱は、豆二斗、糠二斗、鹽一斗、以上合計五斗を掲ぎ合せて造る故に云ふとす)

ことごと 店の物かけて取る道中の小荒、重れて爰へうせうかと、荒き風にも當らぬ身を握拳七つ八つ、うんといふ程敵かれて(槍殺)

ことごと 子なかなす 尤も家も商賣も私の

ことごと 物とは申しながら、子中なしたなかなれば、もう今では屋財家財皆主の物でござります(重井筒) 子なかなしてもつひに見ぬかため(天細島)

ことごと 間の子までまうける。子をこしらへた程の間柄である。狂書もらひむこに「子中なしたるなかを、でるぞひくぞといふ事はあるまら」

ことごと 袖から出す小半入の徳利に餘る親心(露門松) 小半入の徳利のけんどん酒、頭張に十文出し(吉岡榮)

ことごと 煎薬と練薬と鍼と按摩でやうやうと命繋いで、たまさかに逢うてことごとに甘えうと(分懸) 桑の木とも榎の木とも、ことごとに似合うたあばうの木とも見さんせ(反魂香)

ことごと 「ことごと」は「ことごと」ともいひ、「ことごと」は「ことごと」ともいひ、名詞の敬語として用ひる女詞。粉にはたく「はたく」を見よ。

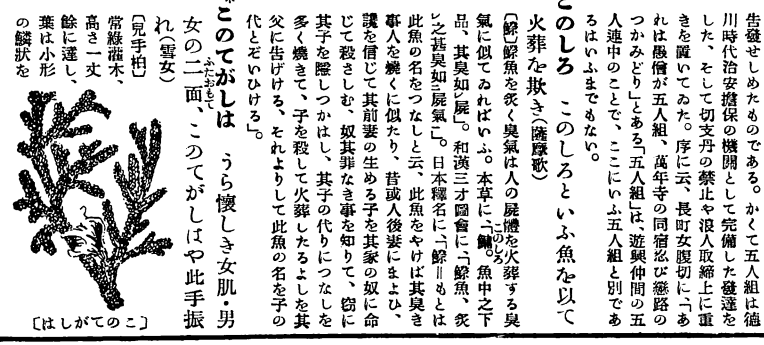
ことごと 借つた金は二百匁、明日になれば手形の通り一貫匁で返す約束、それよりも悲しいは親兄の所ばいふに及ばず、兩町の年寄五人組へ先様からこととわる(女殺)

ことごと 五人組五百を一組とした臨時的團結である。五人組の名稱は何時代から始まつたか詳ならねども、天文頃既にこの稱があつた。盜賊・拘捕・辻斬などが頻にあつたので、治安維持の爲めに五人組合願結の制を定め、組合相警あつて罪惡を犯さむと申し、若し罪惡を敢てする者があつたらば、其組合から告發せしめられたものである。かくて五人組は徳川時代治安維持の機關として完備した。盛衰した。そして切支丹の禁じや浪人取締りに重きを置いてゐた。序に云、長町女復切に「あれは限が五人組、萬年寺の同僧侶が縁路のつかみどり」とある「五人組は、遊興仲間五人連中のごとで、ここにいふ五人組と別であるといふべきでない。

ことごと 火葬を欺き(薩摩歌) 鯨魚の名を欺き、臭氣は人の屍體を火葬する臭氣に似てゐる。本草に「鯨魚中之下品、其臭如屍。和漢三才圖會に「鯨魚、或之其臭如尸屍氣」。日本釋名に「鯨魚」とは此魚の名を三なしと云、此魚をよげば其臭き事人を驚くに似たり、昔或人後妻にまよひ、誤を借して其妻の生める子を其家の奴に命じて殺さむ、奴其非なき事を知りて、密に其子を隠しつかはし、其子の代りにつなしを多く焼きて、子を殺して火葬したるよしを其父に告げける、それよりして此魚の名を子の代とせしむける。

ことごとがしは うら懐しき女肌、男女の二面、ことごとがしはや此手振れ(毒女)

ことごとがしは 常緑灌木、高さ一丈餘に達し、葉は小形の鱗状を



【はしがてこの】

なして繪巻に類し筆を立てたるがやうであらふ語につづけていふ。
*このはむしや 木葉武者五十百斬
つたるとして何の益がある(倉精山)
「木葉武者雜兵。木葉の風にはらはらと散るやうに軽くして重みの無いのを云うたので、曾我虎が磨に「徒士足輕の吹けば散る木葉侍が高名して」、文武五人男に「やれ頼めこつば武者」とある。「木葉侍」「こつば武者」や、その他「木葉天狗」「木葉坊主」など總て身分の輕く卑い者を云ふのである。

このり さて御鷹はつみえつまい。
さしげ・せう・準・このり(百日曾我)
「兄鶴」はいたか(鶴)の雄。和漢三才圖會に「兄鶴。和名古能里。鶴之雄也。脚極細而易折。能捉鴈已下小鳥。最後者捉鴈。」
近衛流 諸の本は近衛流、野郎帽子は若紫、悪所狂ひの身の果は、斯くなり行くと定まりし(天細鳥)

近衛流 諸の本は近衛流、野郎帽子は若紫、悪所狂ひの身の果は、斯くなり行くと定まりし(天細鳥)
近衛流 諸の本は近衛流、野郎帽子は若紫、悪所狂ひの身の果は、斯くなり行くと定まりし(天細鳥)

近衛流 諸の本は近衛流、野郎帽子は若紫、悪所狂ひの身の果は、斯くなり行くと定まりし(天細鳥)

近衛流 諸の本は近衛流、野郎帽子は若紫、悪所狂ひの身の果は、斯くなり行くと定まりし(天細鳥)

近衛流 諸の本は近衛流、野郎帽子は若紫、悪所狂ひの身の果は、斯くなり行くと定まりし(天細鳥)

近衛流 諸の本は近衛流、野郎帽子は若紫、悪所狂ひの身の果は、斯くなり行くと定まりし(天細鳥)

近衛流 諸の本は近衛流、野郎帽子は若紫、悪所狂ひの身の果は、斯くなり行くと定まりし(天細鳥)

「天の五横に火帝入れば云云」を見よ。
*こはばらば手本はこれと内へ投入
れ(関八州)
「強張」強情を張る。

*こはひ いやいや微塵こはひにな
ればとて(倉精山)
「粉灰」「こつばひ」といひ、細かく碎けること。大矢歌・第七に「微塵粉灰に碎かれて」。小林 衛士の焚く火と品變る、かの小林が舞扇、これも浮世の形見こそ、今ばあだなれ松風や(生玉)

小林 衛士の焚く火と品變る、かの小林が舞扇、これも浮世の形見こそ、今ばあだなれ松風や(生玉)

小林 衛士の焚く火と品變る、かの小林が舞扇、これも浮世の形見こそ、今ばあだなれ松風や(生玉)

小林 衛士の焚く火と品變る、かの小林が舞扇、これも浮世の形見こそ、今ばあだなれ松風や(生玉)

小林 衛士の焚く火と品變る、かの小林が舞扇、これも浮世の形見こそ、今ばあだなれ松風や(生玉)

小林 衛士の焚く火と品變る、かの小林が舞扇、これも浮世の形見こそ、今ばあだなれ松風や(生玉)

小林 衛士の焚く火と品變る、かの小林が舞扇、これも浮世の形見こそ、今ばあだなれ松風や(生玉)

驕慢の心を生じない、これ四つの美事、威儀儼然として自重しても益く廣くは、これが五つの美事である。論説・辨日篇に「子曰、尊五美、屏四惡、斯可以從政矣。子張曰、何謂五美、子曰、惠而不驕、威而不猛、欲而不貪、泰而不驕、威而不猛、子曰、何謂惠而不驕、子曰、因民之所利而利之、斯不仁而得仁、又惡貧、君子無三憂、無三小大、無三敢慢、斯不亦泰而不驕乎、君子正其衣冠、尊其瞻視、儼然人望而畏之、斯不亦威而不猛乎。」

*ひぐち 鯉口・鈔に握り添
(酒吞童子)
「鯉口」刀の鞘口で鐔と相合ふ所。

*こひめ おりほは花(曾根崎)
八九なる おりほは花(曾根崎)

*こひやう 源氏の大將義經に見参
のしるしに、小兵ながら中差を参
らせん(津丹三郎)

*こひやう 源氏の大將義經に見参
のしるしに、小兵ながら中差を参
らせん(津丹三郎)

*こひやう 源氏の大將義經に見参
のしるしに、小兵ながら中差を参
らせん(津丹三郎)

*こひやう 源氏の大將義經に見参
のしるしに、小兵ながら中差を参
らせん(津丹三郎)

*こひやう 源氏の大將義經に見参
のしるしに、小兵ながら中差を参
らせん(津丹三郎)

行水で祝願する歌である。武道傳來記卷八、
しきを祝願する歌である。武道傳來記卷八、
しきを祝願する歌である。武道傳來記卷八、

*こびる 二人をどうと引敷いて、や
あこび過ぎたる奴等かな、斯波左
衛門が家来藤内太郎家治ぞ知つ
らん(雲安) 藤内四郎取つて返し

*こびる 二人をどうと引敷いて、や
あこび過ぎたる奴等かな、斯波左
衛門が家来藤内太郎家治ぞ知つ
らん(雲安) 藤内四郎取つて返し

*こびる 二人をどうと引敷いて、や
あこび過ぎたる奴等かな、斯波左
衛門が家来藤内太郎家治ぞ知つ
らん(雲安) 藤内四郎取つて返し

*こびる 二人をどうと引敷いて、や
あこび過ぎたる奴等かな、斯波左
衛門が家来藤内太郎家治ぞ知つ
らん(雲安) 藤内四郎取つて返し

*こびる 二人をどうと引敷いて、や
あこび過ぎたる奴等かな、斯波左
衛門が家来藤内太郎家治ぞ知つ
らん(雲安) 藤内四郎取つて返し

*こびる 二人をどうと引敷いて、や
あこび過ぎたる奴等かな、斯波左
衛門が家来藤内太郎家治ぞ知つ
らん(雲安) 藤内四郎取つて返し

*こびる 二人をどうと引敷いて、や
あこび過ぎたる奴等かな、斯波左
衛門が家来藤内太郎家治ぞ知つ
らん(雲安) 藤内四郎取つて返し

歴る野干(こざめり(本領貫我) 人の手にある中は萬劫経ても世界の寶(今川了俊)

*こぶ 國も御代も打かへて手を盡したるこぶもあり(國性鑑)

*こぶ 主も心をおく綺の袴もとわたりの昆布の皮 こばばつたる顔付にて(大經師) 花に鶯、紅葉に鹿、こぶに山椒、戀に酒(花符) 獅子に牡丹、昆布に山椒(雪女)

*こぶ 死んでやみなん二つの命、隔て疑ふ因果と因果、定まる業と力なき(二枚繪) 御果報の花枯れて業因の霜に衰へ給ふ(天麩鹿) 時宗を討たせし(さへ、國法とはいひながら餘程業がわいてゐる(加増貫杖) 昔は昔・今は今、主面ひろくこぶが

わるい、面面の立身づく義理も仁義も入るものか(絶勢) 海上太郎業くさらかし居たりしが(安夫也) 死したる千鳥が軀より現はれ出づる願書の業火、清盛の頭の上車輪の如く舞ひ火るめき(女護鳥) 業さらしめ・だいばめ、如何な下人下郎でも蹈むの癖の(はせぬこと(女殺) 四方八面前栽柴山道うつ捲くつ、隠れつ見えつ業道自在(兩八州) こちとはいかい業人と、顔を見合せ泣居たり(丹波與作) 流れの罪をかけて見る業のはかりの鍾には(反魂香) こぶなわわわして呪む顔、巴御前きつと見て(會稽山)

善惡種々な事を造作するをいふ、法華經に「善惡業緣」。

「業因」とは、善業或は惡業はその人の未來に善惡の果を受ける因種なればいふ。

「業火」とは、瞋恚の焰、地獄の猛火。業を誦かす。氣をいれたたす。

「業通」は宿業によつて自然に得た神通力といふ。俱舍論九に、「一切通中、業通最疾、凌空自在、是謂通業、通由業得、名爲業通」。

「業秤」は閻魔の廳にある。前世に於て造作した罪業の輕重を量りて地獄を墮すといふ。佛說地持菩薩變心因緣十五經に「業匠精巧、懸七秤、量身口七罪、爲私輕重」。

た罪業の輕重を量りて地獄を墮すといふ。佛說地持菩薩變心因緣十五經に「業匠精巧、懸七秤、量身口七罪、爲私輕重」。

*こぶら すりちがひに小腕を取りこぶら高股ちよつとちやつりちよつと斬り(國性鑑後日)

*こぶら 親にも恐れぬ不道人、御邊に言負け給ふべきか(統天皇)

*こぼり 古木實罪人を古木に吊して賣あること。

*こぼり 古木實罪人を古木に吊して賣あること。

*こぼり 古木實罪人を古木に吊して賣あること。

とて惡業の業と心得、親の敵を射ることと故實を、偏に覺えしな、これ常射馴れて矢業よき故、わざの字の聲にて業の矢といふ義なりと、殊更に曲解して場面を面白うしてゐる。

「こぶら」すりちがひに小腕を取りこぶら高股ちよつとちやつりちよつと斬り(國性鑑後日)

「こぼり」古木實罪人を古木に吊して賣あること。

「こぼり」古木實罪人を古木に吊して賣あること。

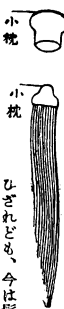
「こぼり」古木實罪人を古木に吊して賣あること。

「こぼり」古木實罪人を古木に吊して賣あること。

に本尊を安置し、火爐を設け、檀木・乳木と云ふ長短二種の薪を用ひ、香・五穀・蘇油等諸種の供養物を捧げて行法を修す。蓋し智慧の火を以て煩悩の薪を焼き、真理の性火を以て魔害を誦すの懺悔とする。大日經疏十五に「護摩は燒哉也、由護摩能燒除諸業」云々。

こまぐら 髷・小枕取つて棄て、地髪ばかりを鉢巻し(百日曾我) 挿柳・笄・紺小枕(薩摩歌) 別れの涙亂れ髪共に落來る膝の上、小枕棄つて丈長も捻元結に大髻(雪女)

「小枕」鬚の根を高くし髻の締よい爲に、中剃の上には押當て入れるもので、はじめは附木などを輪にして用ゐたか、紙を堅く束ね又は黃楊などで作り、其上を紺紙または紫絹で包むやうになつた。嬉遊笑覽一の下の容儀に、「小枕は町方にて文化の初頃よりすたれて用



こまさらへ 聖秀(こま)の武士はこまさらへにて掃く程あるべし(千正犬)

「こまさらへ」(細把)の鞆。木の葉など掻集めるさうひ。このはがき。

こましやくれる 經正殿もこましやくれて十四の春から聲が(はり)越こまされるといふ。老成ぶる。年の程よりおとなびてゐる。偶言集(下)こましやくれる。コは助語、シヤ反サ也、マサは長の義タレは重クレルのクレルにてクレルの反也、長氣の義なるべし。浮世花鳥風月花之部、花笠は忍びの種の條に「城の口元は宛然定家流への字の如く、すこしこまされし

を好ける人もあればなり」。

こまぢをどり や、こ踊・木曾踊・小町踊・伊勢踊(女護摩)

「小町踊」小娘が美衣を着、袴を掛け、造花を挿み、小大鼓を打撃し、輪になつて歌ひながら踊る、その踊の名、好色一代女、卷一、舞曲の遊興の條に「萬上京と下京の連ひありと耳功者なる人のいへり、浴衣染の花の色も移りて小町踊を見しに、里の細角なる振袖に太鼓の拍子、四條通りまでは静かにゆたかに、いかさま都めきたり、それより下は、町筋がざりて聲せはしく、足音はたつき、かかも變るものぞがし」。

こまつなぎ 駒繫の草(用明天皇)

「駒繫」山野に自生する草で、高さ一、二尺に達す。葉は互生し、羽狀複葉で、多数の小葉より成る。花は紅紫色または白の繖形花冠を有し、葎の花に似て繖狀花序をなす。果實は六分ばかりの莢である。

獨坐形の白鳥毛 備後の福山(こまなりの白鳥毛(薩摩歌))



(ぎなつまこ)



(備後福山の城主松平下總守忠雅の鎧標)

ごまのはひ 或は騙り・鳩のかひ・追割・押入(ごまのはひのねだり取り(城) 往還の護摩の灰か・とろげうか(用明天皇))

このかは(とつこを見ごとといふがもつ。眞言宗で行法に用ゐる護摩または獨鉤もある。人を騙して財貨を奪はばる者をいうたことか。〔風流曲三味線寶永七年刊所載〕ら起つた語であら。



ごまひぎせ 延喜の帝・陸平永寶・駒曳錢を鑄させて反魂香)

「駒曳錢」大様にして國幣特に大きく、右向の馬首長く延びて穿下に懸し、頭巾を被つた人立つて手綱を曳いてゐる畫錢である。此錢一文を常に財布に入置いて金銭の殖えるまじなひしたたので、畫方野撰(心中大鑑・卷二)に「藥袋の金入には駒曳錢一文、晩の旅籠代にも足らず」と見えである。

ごまめ ごまめで(ごさん)せの春永(夕霧阿波渡) 茄子汁に虹豆の浸

物・燒豆腐の糞物(ごまめ一疋する)は(お)齋か(非)時か(薩摩天皇)

「糞」糞を素乾にしたもの。たぐり。糞を糞盆に寄せて祝の物とするので、ごまめで(ごさん)せとあるのも、糞を御飯盆をいひかけたのである。黒川道祖(日次紀事・正月の條に「吳麻水魚曰田作」。

ごまよせ ししえの長刀ふりかたげ(駒寄近)そ進みける(三國志)

「駒寄門前」に設けて馬の奔放を防ぐ柵。

***ごまやくし** 奥様はうつそり鼻明けてしまへんしよ、小むやくしいあたふの悪い(分鏡)

「小無益しい」やくにも立たない。つまらない。「小無益しい」の「小」は「小面倒な」ない。「小」同じ語で、嫌惡の意を示す語「小やくしい」を見よ。

***ごめろ** そなたが娘お花が(こ)と、そもそも小めるの時分から、手形の表も十年(女腹切) ふち様は三十六文、小めろのりんは十文(女腹切)

「小女郎」こめらは「小女童」が「ごめら」。「ごめろ」と讀つた語。色茶屋の小婢。俳諧通言に「女郎屋茶屋に遣ふ小女をこめるといふ」と見えである。

***ごまがい** この茶碗は高麗のこまがい(三國志)

「熊川」朝鮮國慶尙道にある熊川。朝鮮語で「Dongcheon」と云ひ、釜山の西に當る地方から産出した茶碗をいひ、茶人の珍重したものである。「ごまがい」は朝鮮の古訓の熊川(Comkan)の訛で、川上久國撰「高麗國中作圖には熊川と畫い



(熊川)

て「コムテン」と傍訓してある。熊川地方には今の陶磁器を焼いた古跡が残つてゐると云ふ。相漢三才圖會・卷三十一・磁厨具に「熊川即朝鮮咸鏡道地名、大抵高麗裏不潔染、所製磁器形也反形也、割瓦與井戸同時物、希有之重器也。地名都こもがりを見る。

***こもかぶり** 無頼漢の大將・こもかぶりの下地(女腹切)

〔腳罷〕非業の死を遂げて罪を被る義。死刑囚

***こもく** 似合うたやうに鎌倉のこもく渡へのもつこがまし(扇八景)

親の内で働けば、炭俵背負うてもこもく渡へ擔うても、天の下に手なつき頭を下げる相手がな

い(唐船齋)

***こもぞう** 〔こもおく〕弁慶(の約つた語)弁慶

ぞうとなつて此處へござらう(傾城御原)

〔こむそう〕虚無僧の訛。「こもんそう」とも云ふ。探籠笠を振り尺八を吹き、門前に立つて米袋などの施與を乞ふ者。

***こもちすぢ** 大目付は宿谷の左衛門が女房おつげの前、これも二人の手持すぢに鶴龜染めたる素袍袴

(最明寺殿) 今日五日目の麻上下、

雑煮の黒餅・手持筋(反魂香)

〔手持筋〕織物の文の名。太き筋と細き筋と並行したもので、嫁入などの時に着て祝ひのものとす。

***こもむしろ** 自らば手持蓮のうらぶれて、見る目にいやとお

ぼすけれども、子に絆されて御出か(出世景清)

〔手持蓮〕子と共に寝るやうにした幅の廣い筵をいふ。手持妻に喩ふ。振川狂歌集・旅籠の歌に「旅籠して思ひ出づれば旅籠の、手持蓮にしくものぞなき」

***ごもつ** 御物上りの若者(露女) 御物蒔繪の印籠(反魂香)

〔御物〕貴人の御蔵品。御物上りとは、主君から寵愛を受けた小姓あがり。御物蒔繪とは、貴人の御蔵品にふきまはしい蒔繪。

***もりく** の身は墨染の櫻咲く、初瀬にあらわ隠口の、子守奉公(松風)

〔隠口の〕籠りたる園の義。初瀬は山間に籠つた地なれば初瀬の枕詞として用ゐる。この文は初瀬をいうて隠口を出し、隠口に子守苦をいひかけて、同韻語の子守奉公につづけたのである。

***やど** 夜歩き日歩きとほしたて、

歸れば小宿で衣裳をしか(三枝繪)

頭抱へて雇人にかかるはれ、小宿さなへ去んたがの(博多) 禿は遣手な

怖がる、げにまこと中戸小宿でちよつきり一寸間夫を切らるる乗替

の、女郎の恨の夜夜を重ねて附廻したる恐(女夫池)

〔小宿〕男女の密會所即ち色遊の宿をいふ。元祿頃はこんな態の仲立をする宿が公然の秘密的に所所にあつた、之を小宿といふ。傾城色三味線(元祿十四年刊)に「傾城買は申すに及ばず、茶屋狂ひ小宿狂ひ、好色一代女(巻四に、

〔小宿の鳴が機嫌取心つくくるをかし) 小町の者、小屋の者十手引提げ(博多)

〔小屋者〕非人(その條を見)。)

***こゆひ** 螺鈿の手箱にやうでう一管・小結の烏帽子(孕盤盤) 左折に小結をゆひ、御烏帽子出来たり(烏帽子折)

〔小結〕貞丈雜記・卷三・烏帽子之部に「小結は組紐二筋を以て結ぶ也、色は何色とも不定、又紙捻にて小結する事布衣記に見えたり、これは少し行儀を正す時の事なり。……小結の仕様は緒一尺

計二筋をそろへて誓にかへ一結びて、その餘りの緒、細く絞ちて包みひねり、紙捻の内より外へ引出して、まねぎに付けてかたわなに結び置く也、わなはその主の左へなし、緒の端は右へなる也。」

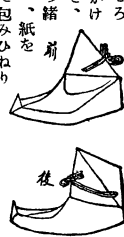
***子故の闇** 明けて出行く先も闇、跡も子ゆゑの闇の夜に、迷ふ親こそ悲しけれ(萬年草) 子ゆゑの闇に迷はされ盗みして顯れた(女段)

〔子を思ふ心の闇を見)。

***ごよくに** 五欲七情種種の罪(嬋山遊)

〔五欲〕色・聲・香味・觸は人の欲心を起すものなれば、釋氏要覽下に「五欲謂の色・聲・香味・觸也。」

***ごよぎ** 眠りがちなる拍子木に、番太が足取う鳥足、ごよぎごよぎも聲更けたり(天網島) くるくるたぐる風の夜ば、せきせき廻る火用心、ごよぎごよぎごよぎも人忍ぶ(天網島)



細く絞ちて包みひねり、紙捻の内より外へ引出して、まねぎに付けてかたわなに結び置く也、わなはその主の左へなし、緒の端は右へなる也。

***ごりやう** 「ごりごり」の條を見よ。

***ごりやう** 「ごりやう」を見よ。

***ごりゅうじん** 五大神王五龍神の祕法を行ひ給ひける(用屋天皇)

〔五龍神〕烏龍、蛇龍、蝦蟇龍、馬龍、魚龍。

***ごりん** 子弟主従父子夫婦五倫の親しみ何れおろかば無き中に(卯月潤色) 儒道を學んで五倫の道を守り、正直柔和の君子國と傳へ聞く(大藏冠)

〔五倫〕父子、君臣、夫婦、長幼、朋友の五つ(五倫)の道。孟子・滕文公上篇に「使契爲司徒、教以三人倫、父子有親、君臣有義、夫婦有別、長幼有序、朋友有信。」

***ごりん** 禿どもが灰寄せ、五輪まで立てたもの、何の偽り申しませう(反魂香) 男も女も五輪五體に違つたる處は三寸四方、魂に違ひはない(鶴龜)

〔五輪地〕水・火・風・空の五大を五輪となす。

〔五輪體〕男も女も五輪五體に違つたる處は三寸四方、魂に違ひはない(鶴龜)

〔五輪地〕水・火・風・空の五大を五輪となす。

〔五輪體〕男も女も五輪五體に違つたる處は三寸四方、魂に違ひはない(鶴龜)

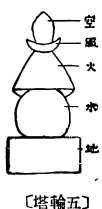
〔五輪地〕水・火・風・空の五大を五輪となす。

〔五輪體〕男も女も五輪五體に違つたる處は三寸四方、魂に違ひはない(鶴龜)

〔五輪地〕水・火・風・空の五大を五輪となす。

〔五輪體〕男も女も五輪五體に違つたる處は三寸四方、魂に違ひはない(鶴龜)

この五大法性の徳を具足圓滿すれば輪と云ひ、世界を以て五輪の所成とする。大日經疏十四に、「一切世界皆是五輪之所依持、世界成時、先從空中而起、風、風上起、火、火上起水、水上起地、地、水、火、風空を方圓三角・半月、(覺禪鈔造塔法下所載)圓形の五形を以て表はし、その形相を配して塔を造る、これを五輪塔とす。



〔塔輪五〕



地水火・風・空の五大は物質的要素で、頭・兩手・兩足の五體は吾人の肉體を構成するものである。よつて以て「五輪五體」を吾人の肉體の念にいふ。

*ころも 山姥は山路にて薪木をころもせ給ひける(偶田川)

〔權〕伐る。「ころ」(伐)「まる」(切)。「かる」(刈)など同じ語源から出た語である。「山姥は山路にて云云」を見よ。

*ごれう 天の恵か降る雨に御寮の御立は延引す(倉橋山) 御寮のその日の御賞瓶(會稽山)

〔御寮〕貴人の敬稱。御寮を貴人の敬稱に用ひたのは源平盛衰記・義經記などにも見えてゐる。

*ころろ 其方達はしゆるろ・ころろに上つて、すばといはば鐘・太鼓一度に打つて打立てよ(加増會秩)

〔鼓樓〕太鼓を置き時を報じる樓で、鐘樓と相對して講堂の傍にあつたものである。

ころびました御免あれ(兼合殿)

〔轉〕切支丹宗から改宗するをいふ。倭詞菜に「ころびし那蘇の外道に入りたる者の佛道に歸したるをいへり、轉の義なるべし。一説に刑に行はるべき者多ければ依に入れ積み置けり、頭のみを出したるに、歸服せし者をば彼をころばしのけたるよりいふともいへり。果林子のこの語は、轉び倒れるをいひかけたのである。

*ころもて かがが手織の衣手に(兼好) 我が衣手は露にぬれつつ(天智天皇)

〔衣手〕袖。「我が衣手は云云」は「秋の田の云云」を見よ。

ころり げんこ微塵にさいなんで、ころりと腰に引つ附け(百合合)

一人に百文宛こそ取らせけれ、...ころりばしたぞと悦びて(今川了庵) 駕籠賃ころり、ころりば知らぬ、知らずば錢百(博多)

鐘百文の符牒であつて、駕籠昇などの者のいふ語。「きり」を見よ。

*ごわう 三日に三枚七日に七枚、起請齋紙の牛玉のうらなく、灰に焼きつつ互に飲んだる水も漏さぬ中(歎念佛) 熊野の牛玉の村鳥、比翼の養紙引かへ、今は天罰起請文(天網島) 牛玉の裏に誓紙一枚書文(天網島) 熊野の鳥がお山にて三羽づつ死ぬると昔よりいひ傳へしが(天網島)

〔牛玉佛〕または佛教修驗道に關係深し神社から出す符印の一種であつて、牛玉寶印或は牛玉寶命と記し、此紙の裏面に起請文を書くに用いたのである。牛玉の義につきては古來諸説あれども、按ずるにもと牛玉を誤つたのであらう。牛玉は牛膽から得る最も貴重な薬で、之を印色として符の上に印するより牛玉寶印と云うたのであらう。牛玉加持などのあることから考へて見ても、密教には牛玉の靈藥を儀軌に收用し、一種の加持を作成〔熊野の誓紙牛玉の群鳥〕

たのであらう。牛玉は牛膽から得る最も貴重な薬で、之を印色として符の上に印するより牛玉寶印と云うたのであらう。牛玉加持などのあることから考へて見ても、密教には牛玉の靈藥を儀軌に收用し、一種の加持を作成



〔熊野の誓紙牛玉の群鳥〕

したことから、牛玉寶印も起つたのであらう。紀州熊野権現から出す牛玉の起請紙には、鳥が七十五羽あつて五個の梵字形をなし、其間に寶珠の玉が点在し、もと牛玉寶印と捺してあつた、蓋し鳥は八咫鳥の故事から起つて、熊野権現



〔家平流風〕〔載所刊年五徳正〕

の神使とされ、熊野三神は妄語破棄の罪を犯されしものと傳せられてゐるのである。牛玉については谷本集・博物考・和撰三才圖會などに其説が載つてゐるが、だくだいから總て略す。熊野の牛玉の誓紙は熊野比五尼などが寶り歩いたものである。かたひくに「きしやう」を見よ。西遷與志撰色類編百人後家享保三年刊〕之卷に「互に交す誓紙を牛玉の裏に書き。」しだいを見よ。

*ごわつば 小わつばふぜいにとめられしは、母が勸當氣にかかり氣おくれしたる故ぞかし(扇八景)

「ごわらは」(小童)のまつた語。豎子。

*ごあやま 聲山立てて町へ開き、下で濟まぬ證議になれば如何なるおきめにあふと思ふ(卯月庵)

〔聲山大聲〕俳諧談心集。寛文十三年刊。寅近の句に「はやし引や聲山立つる祇園の會」、井原西鶴撰日本永代巻。卷五、三五五分曙のかねの條に「彼の姫約束の如く情氣しだし聲山立つれば」。

ころろあんりふのいん 金剛安立の印を結んで責掛け責掛け祈誓ある(井筒)

〔金剛安立印〕金剛起の印

〔印〕は其條を見よ。云ふ。諸佛を金剛起より安立せしめる印契であつて、其形圖に示す如しである。人差指をば三度屈伸して諸佛を驚覺する。

*ころろががつしやう 金剛合掌施甘露法線掛け責掛け祈誓ある(總師天皇)



〔印起剛金〕



ふ。その形は圖に示す如くである。大日經疏十三に、「令十指頭相契、皆以左手指上加於左手指上、如三金剛合掌也、此云三歸命菩薩也」

こんがうきつた 昔大毗盧遮那世尊秘密真言の印を以て金剛薩埵(總持天皇)

「金剛薩埵」ゾラサツトブ (Vajrasattva) 元祖である。大日如來の直弟で眞言密教の金剛薩埵に傳へられた。

こんがうづゑ 吹出す法螺のかひがひしげなる金剛杖、腰に腰當、首に數珠(女愁)

「金剛杖」修験者などが山岳攀登渉渉する時に使用する杖であつて、密教用具の金剛杵に由來するものである。白木を八角または四角に作つた杖で長さを行者の身長と等しうする。

資持什物器、金剛杖品に、「金剛杖は得度婆塞の三昧耶形、金胎不二の標案なり、上の顛頭は金剛の智、下の四角は胎藏の智、四面は常樂我淨の四徳を表し、方各一寸五分、都て六寸なるは自性の六丈を表す、其長は行者の身長に依る」

こんがうびやうゑ 重代の金剛兵衛四尺八寸、鐔元くつろげ横へし(女夫池)

「金剛兵衛」金剛兵衛作の刀。金剛兵衛の祖盛高は筑前國秋月の刀工で永仁年間の人といふ。二世三世も共に盛高といひ、金剛兵衛と稱した。

金剛不壞 金剛不壞の左右の籠手(大鐵冠)

如何なる強い力を加へても堅固にして破壊さ

れないもの。

金剛夜叉明王

「東方に降三世云云」を見よ。
こんがうきつた 門を守る金剛力士二王を家來に持つたれば(蠟山壁)

「金剛力士」寺門の左右に立つてゐる佛法守護の二王であつて、左を密跡金剛といひ、右を那羅延金剛といふ。口を開いてゐる金剛力士は阿字の表象であつて、口を締めてゐる金剛力士は卍字の表象である。「あらん」を見よ。

こんかきしも 老若男女聲聲に、科人ありと立集ふ、罪かきしも、高聲に、法を破りし、罪科人見せしめなりと呼べる聲、耳にこたへてあさましく(孕常盤)

「紺襪下部」紺襪は紺染屋をいへど、ここは紺のぢぢなしを著た下部をさうたのであらう。「こんだじよう」を見よ。

こんがらせいたか 矜羯羅制吒迦・觀世音光を放つて飛去り給へば(伊豆日記) 我は大聖不動明王の使人、こんがらせいたか勅を受け、これまで來現せしむるなり(心五戒魂) 一に矜羯羅二に制吒迦(用文章)

「矜羯羅制吒迦」兵に不動明王の騎士である。矜羯羅は左側に立つて、天衣を着け袈裟を掛け、襪に一股袴を握る。制吒迦は右側に立つて、天衣を破り左手に金剛、右手に金剛杵を掲つてゐる。聖無動轉一字出世八大童子祕要法品に、「法波羅密密心行、所以出現使者、所矜羯羅に、此云隨順業波羅密即方便行者、所以出生使者名制吒迦、此云息災一也、善隣方便現隨形故也。平家物語、卷五、文覺の荒行の條に、「我はこれ大聖不動明王の御使に金

加羅勢多伽といふ二童なり。本朝用文章のこの文につきては、「台檣の雲を渡き云云」を見よ。

こんぎやう 吹雪にまじる勤行の鈴の聲をしるべにて(井徳太子)のをも見よ。

こんぐだいはふ こんぐだいはふの條行にて戀しき人もあらざれば、何に名残の惜しきからん(釋迦)

「敬求大法法性の理法を究め、衆生濟度の大法を願ひ求めること。」

こんこつ 我其血脈を嗣ぐべき人相、尋常に變り、こんこつの生れあり(烏帽子折)

「金骨仙人の骨相の義、非凡の風骨。白氏文集、一、觀音篇に夢仙の詩句に、「苟無金骨相、不列丹靈名」。

こんごり こんごりのこひといふ名に耳に立つ(以呂波)

「こり」と「ごり」と調子づけていらたのである。「こり」は鮫に似、溪流の岩間に住み、長さ六七寸、褐色で暗色の斑點ある魚。「びんびしゆ」の條を併せ見よ。

こんじやう 今日より魔法を行ひ金翅鳥となり、待つて居れ龍神めら、四大海を干潟となし(嵯峨天皇) 鶴が金翅鳥を狙ふとやら、鷹に向つて謀反の病を療治せんとは、さまより膽の太い奴(持統天皇)

「金翅鳥」から「迦羅羅」を見よ。

こんじん 今年ば爰が金神に當つ

た、それで是ほうだたり(大經師)

「金神」陰陽家の稱する金鬼兼殺神で、巨旦大王とも云ふ。その居る方角を懸方位として忌む。金神の方位は年年巡りて定まらぬ。甲巳の歳は年未申酉の方、乙庚の年は辰巳の方、丙辛の年は子丑寅卯午未の方、丁壬の歳は寅卯戌亥の方、戊癸の歳は子丑申酉の方である。また遊行の日春は乙卯より六日東に、夏は丙午より六日南に、秋は辛酉より六日西に、冬は壬子より六日北にある。この文に「ほうだたり」とあるは、方角に懸方位をいひかけたのである。「きんじん」を見よ。

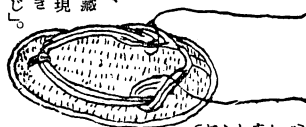
こんずわらち 位に即くもまて、海邊の漁夫、馬乗物もよしなしと、こんずわらちの旅衣(浦島)

「こんず」は「がんじ」がらみ(その條を見よ)などいふ「がんじ」の轉訛であらう。堅固に作つた山草鞋をいふ義經記七、判官北國落の條に「辨慶は大先達にてありければ、袖短かなる淨衣に濁脚年にこんず穿いて、袴のくくり高らかに結びて」嬉遊笑覽卷二中に、「こんずとは、金藏にや、藤の字約めてよむは藤王權現などの例なり、これも堅きに啗へたること金剛と同じ」。

こんだ かうちや頼むとささやげば、こんだ、こんだ預りました(三國志) 内證花草に吹込めば、こんだとはかり、與次兵衛が小袖をかりの難與平(露門松)

「こんだ」吞込んだの略。了承した。

こんだじよう 是は淨土の三部經



とて、權大乘の一部往生極樂の法要たり(扇八景)

〔權大乘〕實大乘に對する語。佛果の大涅槃を求める道を大乘と云ひ、大乘教中未だ眞實義をあらはさない教義を權大乘といふ。

***こんたいりやうぶ** 只今懇切の上は金胎兩部の大日も御照覽ましませ(萬年草)

〔金胎兩部〕金剛界・胎藏界の兩部をいふ。大日如來の理智の二徳であつて、金剛は煩惱を摧破する智の堅利なこと金剛の如く、胎藏は理の諸法を攝持すること恰も腹中に子を胎藏するが如しとの意で、金剛頂經及び大日經に説く所である。

***こんだう** 金堂に講堂や萬燈院にともす火(曾根崎)

〔金堂〕寺院の本堂を云ふ。本尊を安置して柱などに黄金の箔を張りつめたればいふ。

***こんちく** 其聲は坤軸も折れ碎け(龜池)

〔坤軸〕坤は地、軸は車の心木の義。坤軸は地の中心をさす。大地。

***こんぢやないず** めしが様な切先の錆びた錆遺手に廻さるるこんぢやないず(吉岡染)

このにてはなれとすの歌。ことではなれ(だ)。

***こんづ** 天の甘露仙家のこんづ(香積山)

數千人の官女達、天のこんづ・光貝の杯・千顆萬顆の寶を捧げ(龜池)

***こんづ** 金泥の御經(扇八景)

〔こんづ〕瀧標の音便。

こんたいりやうぶ——こんらう

〔金泥〕金箔を粉末にして膠液に溶かしたるもの。紺色の紙に金泥を以て畫いた經文を紺紙金泥の經卷といふ。

***こんてうし** 佛も元ば若草の、馬草刈飼ふ毘沙駒の、舍人が涙主従の、盡きぬ名残は中中に(百合考)

〔金泥御〕梵語はhataka、毘沙駒は毘沙門天の意。悉達太子が出家の時乘つて宮殿を出られた白馬の名である。「しやのく」の條を參見よ。

***こんとん** 形に取つては混沌未分(蠟丸)

〔混沌〕「こんこんとん」と見よ。三五曆紀に「未有天地之時、混沌如鴿子」。蠟丸のこのあたり文は甲子祭(天和四年刊、淨瑠璃・加賀正本、第五にある文と大同小異である)。

***紺に香の圖** せね籠に紺に香の圖なり(陸塵歌)

〔紺に香の圖〕 籠に香の圖なり(陸塵歌)

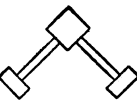
〔圖の香に紺〕

〔紺に香の圖〕

〔圖の香に紺〕

〔紺に香の圖〕

〔圖の香に紺〕



〔拔染のりきちに紺〕



〔圖の香に紺〕

〔坤卦〕坤卦は陰、中切れて兩方に分る。人に譬てれば女子とする。

***こんのだいなし** かくてば果てじと、紺のだいなし生薑一片、腰に一本藥研鏡(陸塵歌)

〔紺〕代無紺無紺の著物。奇麗雜録に「紺は身しきにして、昔より奴僕など多く紺の無地を着す、俗に紺のだいなしといふ是なり」。

***こんのうれん** 紺の暖簾、古への縹子縮緬も由なし(加増曾我)

〔紺暖簾〕元祿頃の製結床には大方紺染の暖簾を懸けてみた。加増曾我にある製結床は、當時にあつた男製結床を應用した某林子の創案であるが、表口に紺染の暖簾を掛け、内に月代の湯に染ぬる爲に火鉢に薪を掛けてあるなどは、當時の男製結床がさういふ状態であつたのであらう。

***こんはん** にや、うんすんすんといひ伏して、聲も惜まず泣き居たり(國性齋後日記)

〔國性〕Companhiaで、仲間(義)。この語は文政元年天章版 Doctrina christiana ドクリナキリシタナ)の6冊紙の NIPPON-NOISEYS に Companhia no Superior. とあつて、古くから傳はつた語である。

浮世床初編中巻に「じやが丸らのこんばんや和和蘭の出張りにござり」とある。「こんばん」とは此の語で仲間(義)である。

***こんへい** あるへい、はなはらうる・かすてら・かるめら・やうかんかん(大徳冠)

菓子(の名を)言立てて唐音らしう見せたのである。「こんへい」は金米糖で、もと葡萄牙語 Confeitos である。「あるへい」は有平糖で、もと葡萄牙語 Alfaias である。「はなはらうる」は花ばらるで、「かるめら」は「はらうる」とも

いひ、もと葡萄牙語 Bo. である。守貞漫稿に「花ボロの菓子」「かすてら」は柿底糖で、もと西班牙の Cassia と云ふ地で製出したよりの名である。「かるめら」は泡糖で、もと葡萄牙語 Caramelo である。「やうかんかん」は羊羹で、唐音の訛であらう。

***こんぼ** 今日よりこんぼは様と申さうか、よれ様に牛蒡はいかが、やあれも大事か、かかのごんぼといふ事あり(涯塵)

〔ごんぼ〕の訛。安原眞寶が「か言(慶安三年刊)に「牛蒡。ごんぼ、ごんぼら。ごんぼは様と申さうか」とあるは、八幡は牛蒡の名産地、勝二郎は八幡の者なればかく云うたのである。雍州府志に「牛蒡。八幡山東園村之産爲名産」、專稱は八幡牛蒡、園村去三八幡半里許」牛蒡を食へば男子の精分を増すと云ふ。されど女子にはいかがと云ふを「よね様に牛蒡はいかが」というたのである。牛蒡を食へば男子の精分を増すと云ふので、井原西鶴撰、大下馬場、二神嶋の病中の條に「この程は水神も若氣にて、夜は遠程に戯れ、あたら水を減して思ひながら、鼻を、各手作の牛蒡を送らばたらは、追付け雨を謂ふと申す」と見え、御前義經記、卷五、呂州まるはだかの條に「八幡牛蒡はいふせの焼付出家衆のまゐるは氣の通らぬことと見えである。「かかのごんぼ」とあるはその條を見よ、八幡の生れやら足に「ごんぼの毛がむくむく」とあるは、八幡は牛蒡の名産地なればかく云うたのである。

***こんらう** 左近の軒廊に兩馬鼻を並べしが(日本武尊)

〔ごんぼ〕の訛。安原眞寶が「か言(慶安三年刊)に「牛蒡。ごんぼ、ごんぼら。ごんぼは様と申さうか」とあるは、八幡は牛蒡の名産地、勝二郎は八幡の者なればかく云うたのである。雍州府志に「牛蒡。八幡山東園村之産爲名産」、專稱は八幡牛蒡、園村去三八幡半里許」牛蒡を食へば男子の精分を増すと云ふ。されど女子にはいかがと云ふを「よね様に牛蒡はいかが」というたのである。牛蒡を食へば男子の精分を増すと云ふので、井原西鶴撰、大下馬場、二神嶋の病中の條に「この程は水神も若氣にて、夜は遠程に戯れ、あたら水を減して思ひながら、鼻を、各手作の牛蒡を送らばたらは、追付け雨を謂ふと申す」と見え、御前義經記、卷五、呂州まるはだかの條に「八幡牛蒡はいふせの焼付出家衆のまゐるは氣の通らぬことと見えである。「かかのごんぼ」とあるはその條を見よ、八幡の生れやら足に「ごんぼの毛がむくむく」とあるは、八幡は牛蒡の名産地なればかく云うたのである。

〔ごんぼ〕の訛。安原眞寶が「か言(慶安三年刊)に「牛蒡。ごんぼ、ごんぼら。ごんぼは様と申さうか」とあるは、八幡は牛蒡の名産地、勝二郎は八幡の者なればかく云うたのである。雍州府志に「牛蒡。八幡山東園村之産爲名産」、專稱は八幡牛蒡、園村去三八幡半里許」牛蒡を食へば男子の精分を増すと云ふ。されど女子にはいかがと云ふを「よね様に牛蒡はいかが」というたのである。牛蒡を食へば男子の精分を増すと云ふので、井原西鶴撰、大下馬場、二神嶋の病中の條に「この程は水神も若氣にて、夜は遠程に戯れ、あたら水を減して思ひながら、鼻を、各手作の牛蒡を送らばたらは、追付け雨を謂ふと申す」と見え、御前義經記、卷五、呂州まるはだかの條に「八幡牛蒡はいふせの焼付出家衆のまゐるは氣の通らぬことと見えである。「かかのごんぼ」とあるはその條を見よ、八幡の生れやら足に「ごんぼの毛がむくむく」とあるは、八幡は牛蒡の名産地なればかく云うたのである。

〔軒廊〕寝殿の南端の東端から續ける廊を云ひ、上に屋根あつて下は土間である。

こもりはつる しゆらいなきんとにせがまれて、ひしやりほんこもりはつる(虎が磨)

安りにある御進帳の「思ひを善達に翻して塵舎那佛を建立す」の「建立」に似せたのである。「それうかうか大放日にして云云」を見よ。

*こもりようのぎよい 天子の装束(唐船術)の御衣もあき(唐船術)

〔装籠御衣〕天皇の召される禮服であつて、日月景辰山龍雉火等の象を飾つたもの。

*こもりんさい 其分では此身が金輪際まで(えこむともいかな、此處は動かぬと(聖徳太子) 金輪際の敵、悪しといふば彼奴が事(鑑鏡三)

逢初めし時の誓文を金輪際と思ひ計め(陸奥歌)

〔金輪際〕大地百六十萬由旬の底、即ち地層の最底に金剛輪がある、その金剛輪の區域を金輪際と云ふ。よつて以て、底の底のどこまでもなどいふ意に用ゐる。「あらがねの」をも見よ。

こころんのおし 名將の家風かうばしき梅檀の林こころんの石、玉の光の世世永き武田の家ぞ類なき(川中島)

〔真備〕石見備前山は美石寶玉の産地である。湘山野録・曼野公撰章藤太后神遊碑・放題に、「真備山出玉 麗水生金」。平治物語卷二、六波羅合戦の條に、「舞へば梅檀の林に餘木なく、真備山には土石悉く美玉なるが如く」。

麗王の邪見云々

「擧揚が三逆も云云」を見よ。

さ

*さ 女は亭主と座を組みて(重井簡)おつつけ且那の引抜き牛蒡、めでたい牛蒡と座を持てば(旋舞)

〔座〕すわる場所。(座は名詞)坐は動詞。「座を組み」とは、二人以上の者が各座を占めて對してあつてゐるをいふ。座を待つとは、座をめてはやし賑やかす意。座席を添へる。

*さ 誰かある討つて出で追散せと、采押取つて下知すれば(雲女)人馬の息をやすめよと、采振廻し呼ばばり給へば(佐佐木)

〔采〕大将が部下を指揮する爲に持つ具で、厚紙を細く裁ちて束ね、これに柄を附けたもの。采配、貞丈雜記武具之部に「さざり(又さざりとも)云ふ」といふ物古は無之、源平の戦の比より室町殿の代に至るまでも無之、……さざりは武田信玄の家に作り始めしなるべし、上古の法式と云ふ事あるべからず、鷹匠の家にて山鷹クマカカのこと)を使ふ道具にさざりと名付けて、竿の先に細く裁ちたる紙を固く結付けて、それを振りて鷹を使ふなり、此鷹の道具より思付きて軍のさざりを作りたるなるべし。

*さ 時宗やらぬ逃さぬと女子のざいにあんまりな百日曾我) 嫁入する身に女のざいで只の事とは思はぬ(反魂香) 合點ゆかぬ新艘殿、女のざいに刀ざいて二階へ上り、誰に恨んで誰を斬る(蛙合歌)

〔際〕分際の際。身分。

*さいいかく まあ待たんせ先刻の小判どうしての才覚ぞ、詮方なきに怖い事などさんせぬか(女腹切) それば至極の才覚、其金は借るか貰ふか何處から出る(飛騨)

〔才覚〕もと、オのおほえに漢字を當てて音讀したものであるとも、或は才學より出た語であるともいふ。オのよく利くこと。機智。算段。工面。

さいぎやうざくら 和歌を守りの宗匠として、西行櫻色深き(賀古教信)

〔西行櫻〕謡曲に西行櫻と云ふ曲名がある。又櫻花製品(寫本)に、此名の櫻に單瓣のもの八重のものあつて花枝の彩色圖が載つてゐる。

齋宮の忌詞 かの齋宮の忌詞、いまはしやとて道もせに、さらすからだを道者にも嫌ひ憎まれ(丹波興作)

齋宮とは未婚の内親王を卜し御杖代に定め、伊勢太神宮に奉仕せしめられた皇女を云ふ、齋宮は神事に奉仕するものなれば佛に關する語を忌む。延喜式・神祇・齋宮式に「凡忌詞内七言、佛稱三子、經稱三染紙、塔稱阿良良岐、寺稱三瓦、僧稱三髮長、尼稱三女髮長、齋稱三片簾、外七言、死稱三依留、病稱三夜須美、哭稱三離垂、血稱三世、打稱三、安稱三、又別忌詞、堂稱三、優婆塞稱三」。この文は祭文の口調によつたもので、「齋宮の忌詞は、いまいましや」の同頭語にかゝる修辭である。

さいくわい 岬岬と響えし崔嵬の山路に疲れ(國性範)

〔崔嵬〕土山の石を聳くを云ふ。毛詩周南卷耳篇に「陟崔嵬、我馬虺隤」とありて毛傳

に「崔嵬、土山の巖石者」。

さいけ 親の敵でも出家は格別、在家となれば見返し置かれぬ弟の敵(萬年草)

〔在家〕僧を出家と云ふに對し、在俗の人を在家と云ふ。

さいしやく 上も下も半死半生、血汐流れて名所繪の屏風さいしやく如く(鎌田) 家をさいしやく繪の具筆(反魂香)

〔さいしやく〕彩色を四段活の動詞に用ゐたのである。いろをさ。

*さいしやく 田夫無道の郎等まで、或は中將宰相と官位を免し召遣ふ(百合草)

〔宰相〕藤原の唐名。太政大臣を相國と云ひ、左右大臣を丞相と云ふに對し、參議を宰相と云ふ。

*さいしやく さこそ恨み憎みし、これぞ罪障となるぞと(卯月巻)

〔罪障〕造作し罪障が往生の障りとなること。

さいしやく うねば坊門のさいしやく(柳女楠)

宰相に西條柳をいひかけたのである。西條柳は精材で掛簾の西條から産出するもの最も佳品で、背角四條の淺い溝線がある。

さいしやく 麗景殿の孫庇、御伴ひは鳩の杖、採桑老の白衣の袖(日本武尊)

〔採桑老〕舞樂の名。老人が白衣を着し、帽後に琵琶を挿むは桑葉に擬したもので、鳩の杖をつき行歩に堪へない様にして舞ふ。

さいたづま 紫竹交りの藪の下、春